猪犬と登る猪猟の頂点 1

田宮 治

胸突き八丁

「胸突き八丁」とは、富士登山で、頂上付近の八丁（約八七二メートル）の険しく急な登り道をいった言葉であるが、人生は押し並べてこの言葉どおりで、「胸突き八丁の道」ばかりである。そんな中で物事を完成したり、念願を成就させようというのだから、なかなか大変なことである。

胸突き八丁とか、分岐点の戦いは、猪猟で頂点を目指すからには必ず突き当たる当然の試練である。この時機の避けて通れない想定外の試練は、どの戦いも激戦を極める。

紙一重が勝負の分かれ目となるが、戦いに必ず勝つためにはさらなる創意工夫が必要で、万全の技術をもって対戦することが重要である。

猪犬たちや猪猟人であっても、伸るか反るかの大一番を戦い抜くことで、必ず勝つための英知や不屈の根性、さらには猪猟魂というようなものまで生まれる。

まさに紙一重の実戦を勝ち取ることで育ち、成長しながら頂点に攀じ登って行くのである。

私は、たかが猪猟であっても、それを人生の大切な趣味にしている以上、やり抜く執念や実行力などを押し出して実践する気持ちは、どこまで登っても挑戦心を忘れないことで、天下に恥じないものでありたいと思っている。教え育つであろう若者たちの猪猟技術や狩猟常識、さらには人格レベルまでも最高のものであってほしいと願っている。

だからこそ、終始身を尽くして頑張っているのである。絶対に猪を獲りたいがために違法の道に進ませたり、失敗のあまり挫折して終わらせ、やめてしまうようなことのない万全の方策を立てて、楽しみを中心にした対策が必要なのである。

胸突き八丁とか、分岐点あたりの戦いは、何としてもこの激戦をしのぎ、かいくぐってやっていかないことには、とても頂点になどたどり着けないのである。

そんな訳で、この時機の戦いは最重要であると位置づけ、全員の力を傾注して戦い続けているのである。

私が気持ちを入れ、繰り返し繰り返し、しつこくやって見せて説明しているのは、紙一重の戦いともなれば実力がそこまで上がってきた証で、勝っても、負けても、それなりの実績が残る大事なのである。

たとえ敗戦であっても、後日の成功に必ず繋がる大切な、とびっきりの宝物、つまり物事の完成に欠かせない重要な鍵が潜んでいるからである。

願わくば、猪猟を志したからには、誰もが突き当たる試練は全力ではねのけ、見事頂点に立ってもらいたい。

せっかく頑張って、やっと成功の鍵が潜む試練にたどり着いたのだから、絶対に逃げず、迷わず、大猪と堂々と勝負して、猪猟の醍醐味と、人生の生き甲斐まで存分に味わっていただきたいものである。

あと一息、楽しみ続け、勝ち抜いた先に夢の頂点が必ずあるのだ、と信念を持って戦い続けたいものである。

ピンチはチャンス

「人は苦労を重ねた分だけ成長する」といわれるように、若い時の苦労はどんどんやってみることである。

何事においても、予定どおりにうまくいっている時は、人世の教訓など生まれるわけもない。行き詰まったり、挫折してもがき苦しみ、どん底から這い上がる頑張りの中にこそ先に繋がる大切な教訓、つまり成功法があるのだ。

私がそんな当たり前のことに気づくのに何と遠回りをしてきたことか……。気がつけば人生もどん詰まりの七十三歳である。

だけど、私なりに、いかなる時機においても狩猟に対する気持ちは真剣であったと思っているし、一生懸命にやってきたつもりである。

何もそのこと自体を自慢しているのでも、愚痴ったり、後悔しているのではない。ただ一つのこと、たかが猪犬完成であっても、気の遠くなる年月と、血の出る苦労は当たり前だといいたいのである。

もともと狩猟が好きで、その狩猟を究めるために、これまた大好きな犬たちを大切にしてきた。

あくまでも、鳥猟では鳥猟犬を一級品にしようと頑張ったし、猪猟を志したからには、自分の猟法に合う猪犬作りに専念しただけのことではある。

思いどおりの猪犬を完成するとなると、想像を遙に超えた大変な現実ばかりで、とても犬好きや猟馬鹿くらいの次元では対応できない。まさに狂気の世界なのである。

誰でもが見てしまうバラ色の夢とか、理想の計画だって、やってみて分かるのは現実の厳しさである。どんな目標でも、達成するのには気の遠くなる年月で失敗の山を積み、泣き出したくなる失敗と挫折の連続である。

それでも飽きも懲りもせず、妻までも道連れで三六五日、犬たちにかかりきりである。

それも二十頭くらいまでならば可愛いものだが、一〇〇頭ともなると、どんなに理屈をこね回してみたところで他人様から見れば、「よくやっていられるものだ。営業的価値もない犬飼いなどを……」と思うことであろう。

しかしながら、猪猟は犬芸で決まるのである。その犬芸で、猪猟の極意も、勝つために打つ手や、登り詰める近道などの重要な事項に気づき、知ることになるのである。

そんな猪猟の要をなすスーパー猪犬完成のために、何十頭もの個体芸を大切に見ながら何十年もかけ苦心してきたのである。何も天才だからとか、特別な人だから名人になるのでも、初めから素質があったから名犬になるのでもない。

まして、その頂点に君臨しようというのであれば、天才だからとか、素質がなければとかの「特別だから大成するのだ」という考えは捨てるべきである。

もし、そんなことを考えたならばその人の挫折は本物で、二度と立ち上がれないと思うし、終わりなのである。

人間誰もが全く同じことを立案し実行したとしても、行き着くところは天と地の差になることも確かだと思う。常識で考えれば、普通の人が普通の努力をしたならば、その結果は普通である。

当然のことで、目標を達成するには、必ず達成に値する何倍もの苦労や努力をやり抜かなければならない。

この世に特別な人などいるはずもない。皆が同じ人間なのである。ただ一つ違うとすれば、どれだけ努力したかという、ただそれだけのことだと思う。

どこまで登ろうと、所期の目的が達成しようが、大切なことは最後までやり通す信念、つまり絶対に折れない気持ちが物をいうのである。どんな時でも、ピンチはチャンスと考えるべきで、どこまでも思い立った夢は追い続けることである。

私のように何も分からないまま

無我夢中でやってきても、やり続けてさえいればチャンスは必ず来てくれるようで、良い犬群ができて、素晴らしい猪猟ができるようになった。

まだまだ犬舎は黒字経営ではないし、とてもバラ色の夢とはいかないが、それでも猪犬としての価値は実猟の実績と、とんでもない回り道、それと『全猟』誌のお陰などによって揺るぎないものとなっている。

本当にうれしいことで、いまある猪猟界での私の立場は、すべてこの子たちのお陰で成り立っているようなものである。

私が堂々と猪猟をやって見せたり、語り続けられるのも、そばにぞっくり名犬群がいるからである。

その気になればいつ、いかなる山に出猟しようが、一人で最短距離からどんな猪にでも真っ向勝負できる。このまま突進していけば、遙か先の百歳の誕生日に大猪との対決だって夢ではなさそうで、何ともそら恐ろしい限りである。

人間は誰でもどでかい夢を持って追いかけ、限界まで挑戦することがよいのである。どんなに失敗しようが挫折しようが、絶対に諦めないでやり続けているうちに、はたと気づき見えてくる大切なものがある。

それが猪犬育ての極意であったり、猪猟の近道だったりする。一期一会のような素晴らしい出会いまでもが、愛犬たちの見事な働きによるものであり、猪猟のお陰なのである。

私はこの年になって人生の大切なことがこんな形で作られていることを知り、不思議なほど感銘し

上：6カ月のブイ号。初めて実戦に出たものの、どうか猪に出合わないように……

下：さて、どうしよう。ちょっぴり怖い、猪との初対決。今では素晴らしい止め犬になった千代号とカツ号（兄妹犬）の戦いぶり。この後、どんどん咬み込んでいた

ているところである。

止め刺しの重要性

猪猟の難所、つまり胸突き八丁あたりの急坂をすんなりと突破するために大猪の寝屋撃ちや、止め犬群による強烈な谷落としの接近戦から移動タツの張り方、さらには追われ慣れた、ぐれ猪の攻め方に至るまで、言って聞かせても分かりにくいことはすべて実戦で見てもらって、きちっと確認して見事な撃ち込みができるようになったのである。

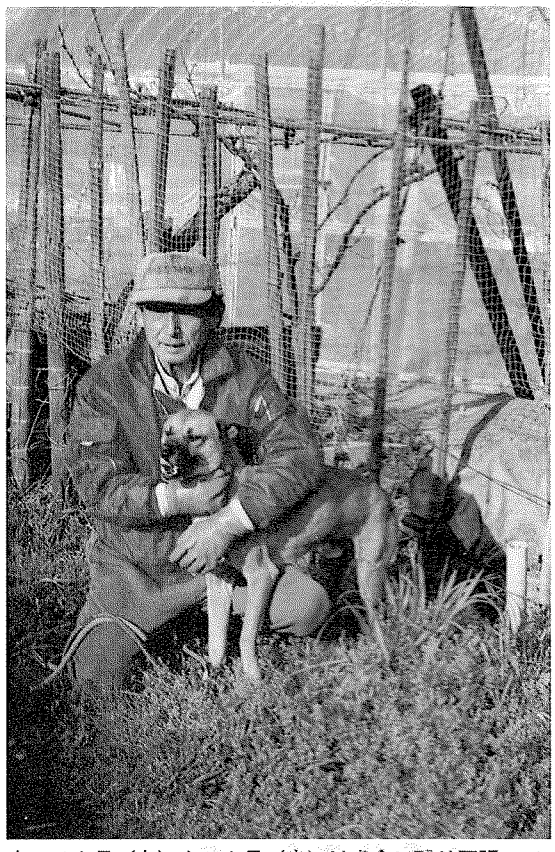
あと一つ残る大技は、猪の止め刺しである。これらの大技、小技は、言い換えれば登山道の難所にかかる鎖やハシゴのようなもので、これなくしては猪猟で頂点を極めることなど、とてもできることではない。

特に猪の刺し止めは、猪止め犬を使役した場合に絶対に必要になる緊急避難用の大切な大技である。犬群も猪に対しては申し分のない極芸を繰り出し、戦い続け、時には咬み込んだら絶対に離れず、全犬で猪をねじ伏せるまでになっている。

山彦会千葉支部の実力もなかなかのものになってきた。猪の獲れる流れがやっと見えてきたようで、時機や頃合を見計らって「そら、これを撃ち獲ってみろ！」と差し出す劇的な場面では、若者らしく元気に突っ走り、見事な撃ち込みができるようになってきた。

まだまだ失敗もあるが、やっと猪の怖さも取れて、勇敢に攻め続け、勝つたびに大喜びである。確実に一戦一戦実力をつけて、目標の頂点に登り詰めている。

なぜ、この時期に至難の技、止



上：リキ号（左）とアキ号（中）は犬舎に残り頑張っている。一番右側は山梨の堀内訓練所に
下：イチに触れ合い。犬から「うるさいなア……」といわれるほど綱引き、褒め、撫でまわす。毎日休まずやるのがミソである（犬はボス号）

め刺しなのか、力説したい事柄が千葉の猟場には山積している。

その第一は、狩る山がどこでも比較的低い。そして、山裾や小沢には必ず民家があり、番犬を二、三頭飼っている。

しかも、民家から続く細い道と、大きく山の下を取り巻くように県道がめぐっている。

こんな猟場で猪猟をするのだから、犬群が猪を発見し鳴き出せば、それに共鳴して民家の犬も騒ぎ出すのが常である。困ったことではあるが、一流の猪犬ならばそんな犬たちに近寄ることはない。

問題となるのは、犬群に追われた猪である。申し合わせたように必ず下に逃げ、谷下あたりで止まることである。

折悪く止め現場が民家の近くや、道路の近くであっては民家の人を驚かせることになる。基本的には安全を確認の上、銃で撃ち獲るべきであるが、追い込まれた猪が民家の庭に入ったり、道路に出る危険を未然に防ぐために、いつも腰にあるナイフで刺し止めることになる。

幸いなことに山が低く、藪のひどい千葉は関東でただ一県ライフル銃が使用禁止である。散弾銃であるから止め刺しよろしく近射もできるのだが、猪犬群の咬みが強烈で、食いついている犬たちを交わして銃はとても使えない。さりとて、危険で放っておけない。

そんな時、犬たちのケガを防いだり、安全策に欠かすことのできないのが、緊急避難用の止め刺しである。

あくまでも番外編ではあるのだが、一流猪止め犬群を使役し、特に二、三人とか、単独猪猟では必ず得心ゆくまで繰り返して実戦の場で鍛え上げ、いつ、いかなる時でも堂々と使いこなせるようにしておきたいものなのである。

止め刺しは、猪止め現場では絶対に必要だから、覚えて当然のように使ってきた大切なことなので言い続けているのである。今さら何も、事改めて猪の止め刺しを自慢したり、ことさら格好つけてやってみせるつもりはない。

ずばり言い切ってしまえば、切羽詰まった猪の止め現場では、何もかもが一刻を争う激戦で、興奮の極みである。

そんな中でも、堂々と当たり前のように、即この大技が使えないことには、とても安全で安心できる最高の猪止め猟は押し進められないのである。

そんな訳で、正月はこの難題をどのような方法で覚えてもらうか思案していた。

それでも猟期が始まって一カ月半なのに、急ピッチで押し進めた猪猟の基本である止め猪の撃ち方や、犬群の使い方、狩り込む方法までも思った以上の上達で、五年間も通った、すぐ近くの石井親方のグループにも負けない実力をつけている。

私の心の中の当面の目標は、同じ千葉で、その名の高い石井親方と斉藤勢子長以下、宮崎さんらの名手をこの猟期で超えることであった。

やっと、その悲願が見事な支部の頑張りで達成のめどがついた。石井親方グループでの楽しかった五年間の総括や、千葉支部の一カ月半を思いながらの新年は良い心の癒しになったし、何よりも前進の期待にひと息ついた良い休みになった。

よしよし、この調子で押し進めればよい。

何よりも私には、信じてついてくる素晴らしい若者たちと、仔犬の時から片時も休まず手塩にかけた、どこに出しても恥ずかしくない自慢の猪犬群がぞっくりついている。その気になれば、どんな猪猟だって思いどおりにできるまでになっている。

よし一丁、正月が明けたら大猪の止め刺しをやってみるか。猪猟での危険は自ら取り除き、いつでも安心して、安全な猟が楽しめるために、何としても分かりやすい良い方法で実現したいものである。

（つづく）

スポーツミックス
20kg 5300円　7.5kg 2880円
ドッグフード一袋が全猟を支えます
ドッグフードのご注文は全猟へ！